

2023 年度 神戸市外国語大学 学校推薦型選抜・社会人特別選抜 入学試験問題【小論文】

以下の文章を読んで、問いに答えなさい。

問：「文化相対主義」について先に要約したうえで、これに取って反論とするならば、どのような議論が可能か、本文で挙げられたもの以外の事例を挙げて 800 字以内で論じなさい。(100 点)

カナダ極北地方の狩猟採集民ヘヤー・インディアンの社会では、20 世紀初頭まで、深刻な飢餓にまみれると親子間でのカニバリズム（人肉食）が行われていた。あるヨーロッパ人の宣教師は息子と娘を殺して食べたという男に罪の意識をもたせようとしたのだが、男は「祖先にならって、私が自分の生命を何とかしたことのどこが悪いのか？」と答えたという。

キリスト教では、カニバリズムは神の掟に背く罪である。宣教師からみれば、ヘヤー・インディアンは大罪人となる。だからヘヤー・インディアンは野蛮だ、人間として劣っていると考えるなら、自分たちの生活様式と価値判断が最も自然で妥当なものだというエスノセントリズム（自民族中心主義または自文化中心主義）に陥ることになる。

ヘヤー・インディアン自身は、人に食べられて死ぬことは「幸せな死」ではないが「良い死」であると考えている。なぜなら、食べられて死んだ人は順調に来世を旅して再びこの世に生まれ変わることができるからである。

そういう死生観をもつ人々もいるのだということを知り、自分にとってはおぞましいことであるが、そう思うのは自分がヘヤー文化を身につけていないからであって、もしヘヤー社会に生まれ育っていれば自分もヘヤー・インディアンと同じように考えたであろうと反省し、エスノセントリズムを脱するならば、ヘヤー文化も一つの尊厳ある文化として尊重しようという心構えをもつことができる。これが、文化相対主義である。

このような考え方は、19 世紀に主流だった進化主義や人種主義による文化の序列化を否定し、個別文化の独自性と対等性を強調した 20 世紀のアメリカ人類学によって生み出された。そして、文化相対主義の名を掲げて、この思想の普及に貢献したのが M・J・ハースコヴィッツである。

ハースコヴィッツによると、文化相対主義の原理とは、人間は自分が成長の過程で身につけた文化に基づいて経験を解釈するのであり、そのように特定の文化に色づけされた経験からさまざまな判断を導き出すというものである。文化的背景が異なれば、判断の仕方も変わってくる。それゆえ、自然の認識から道徳的な評価に至るまで、あらゆる判断は文化に応じて異なる。つまり相対的だということである。そして、ハースコヴィッツは、このような文化の相対性は、集約的なフィールドワークに基づく民族誌によって豊富に実証されていると述べる。これが、文化人類学の知見としての文化相対主義である。

このことから、ハースコヴィッツは、エスノセントリズムに陥ることなく客観的に異文化を研究するためには、その文化の担い手自身がどのような基準で物事を判断しているのかを把握しなければならないと述べる。これが、文化人類学の方法としての文化相対主義である。

さらに、ハースコヴィッツは、それがどんなに自分たちの生き方と異なるものであっても、ほかの文化が価値を置く生き方を均しく尊厳あるものと認めるべきだと主張する。なぜなら、いかなる評価基準も特定の文化の所産である以上、文化を越えた絶対的な評価基準をもち出して生き方の優劣を決めることはできないからだ。それだから、文化の違いを尊重し、多くの異なる生活様式の価値を認め合って、お互

2023 年度 神戸市外国語大学
学校推薦型選抜・社会人特別選抜 入学試験問題【小論文】

いの伝統に対して寛容な態度を取らなければならないとハースコヴィッツは述べる。これが、文化人類学の基本理念としての文化相対主義である。(後略)

出典：沼崎一郎（2009）「文化相対主義」、『文化人類学辞典』776－777 頁。

（ただし、引用の際に一部を省略・修正した）